

# シャドーイングを用いた発音指導

## —オンライン学習プログラムを利用して自律的に学ぶ—

阪上彩子（関西学院大学）  
sakaueayako@kwansei.ac.jp

### 【要約】

日本語を分かりやすく発音することで、コミュニケーションが円滑に行えるようになるが、発音の習得には自律的に学ぶ必要がある。本研究は、受講生がオンライン学習プログラムを利用して自律的にシャドーイングで日本語の発音を学ぶことによって、受講生の発音が向上したかどうか、発音についての自己モニター力が向上したかどうか、その実践の効果を明らかにすることを目的とする。調査の結果、どのクラスの受講生も発音の向上が見られた。しかし自己モニター力が向上した要素が見られなかったことが分かった。

### 1. 研究の目的

日本語非母語話者は日本語のレベルが高くても、発音でトラブルが起こってしまうことがある。外国語でコミュニケーションを円滑に行うためには、発音を明瞭にすることが重要である。しかし発音を向上させるには、毎日積み重ねてこつこつと練習する必要がある。また自分の発音についてどこが違うか気づく能力、自己モニター力が必要である。このため、教室内で発音を学ぶだけでなく、教室外でも自律的に学ぶ必要がある。そこで受講生の発音向上を目指し、自律的に発音を学ぶことを目標として、受講生に日本語の発音指導を行った。本研究は、その実践の効果を明らかにすることを目的とする。

### 2. シャドーイングを用いた実践研究

#### 2. 1 シャドーイングの教材について

シャドーイングはもともと同時通訳者を目指す人の基礎訓練の一つとして、通訳者養成機関で使われてきた訓練法であったが、現在日本語教育の現場でも発音指導としてよく行われている。教材も続々と出版されており、出版年順に教材のタイトル、レベル、著者、出版社を表1に示す。発音は繰り返し練習する必要があるため、素材を工夫しなければ練習が単調になって怠ってしまう可能性がある。学習者のモチベーションを維持するため、表1を見ると近年は就職活動や介護など場面を特定した教材が多く出版されていることが分かる。

表1 シャドーイングの教材リスト

タイトル	レベル	著者	出版社	出版年
シャドーイング日本語を話そう初～中級編	初中級	斎藤仁志他	くろしお出版	2006
シャドーイング日本語を話そう中～上級編	中上級		くろしお出版	2010
シャドーイングで日本語発音レッスン	初級	戸田貴子編著	スリーエー ネットワーク	2012
1日10分のシャドーイング！就活・仕事のにほんご会話	中上級	公益社団法人国際 日本語普及協会	アスク出版	2015
シャドーイング日本語を話そう 就職・アルバイト・進学面接編	中上級	斎藤仁志他	くろしお出版	2016
シャドーイングで学ぶ 介護の日本語 場面別声かけ表現集	中上級	田辺淳子	凡人社	2018

また「シャドーイング」とタイトルでは謳っていないが、シャドーイングを扱う日本語の発音の教材を出版年順に表2に示す。どの教材でも視覚的に発音の違いを示しており、それも1つ1つの単音の違いではなく、フレーズ単位でイントネーションやリズムを示している。表1と表2よりこの豊富な教材の量から、シャドーイングが日本語教育でよく用いられていることが分かる。

表2 発音の教科書リスト

タイトル	レベル	著者	出版社	出版年
初級文型でできるにほんご発音アクティビティ	初級	中川 千恵子他	アスク出版	2010
毎日練習！リズムで見につく日本語の発音	初級	赤木浩文	スリーエー	2010
にほんご音読トレーニング	初級	松浦真理子	アスク出版	2012
伝わる発音が身につく！日本語話し方トレーニング	上級	中川千恵子	アスク出版	2015

## 2. 2 シャドーイングを取り入れた授業実践研究

シャドーイングを取り入れた授業実践報告については、大久保他(2013)、築山(2013)、中川(2014)、柴田(2015)、杉本(2017)などある。多くの論文は、教室内で発音指導の時間を割き、その効果について報告しているが、自律的にシャドーイングを取り入れた実践を行った研究は柴田(2015)がある。柴田(2015)は、北米の私立大学日本語1年生対象にオンラインシステム「Speak Everywhere」を利用して、自律的に発音(特に韻律)を練習する。練習方法は、アニメのビデオを見て、シャドーイングし、録音する。教師は、録音した音声を聞いて、筆記と音声でフィードバックを行う。その結果、アニメが好きな受講生はモチベーションが上がり、何度も練習するようになり、韻律の重要性について認識できたとのことである。

本研究では、自律的に学んでもらうために、教材を利用した発音指導ではなく、自分の好きなアニメで学べる柴田(2015)の報告を参考にして、オンラインシステムを利用して、生の素材をシャドーイングする発音指導の実践を行うことにする。

### 3 シャドーイングの教材

#### 3. 1 「Speak Everywhere」<sup>1</sup>について

「Speak Everywhere」とは、外国語学習における口頭練習に特化したオンライン学習システムで、2009年パデュー大学のCenter for technology-enhanced Language Learningにおいて作成された。教師が作成した課題に学習者が音声で応答し、その音声をオンラインで提出する。教師はその音声を聴き、採点したりフィードバックを返したりすることができる。また好きなビデオをシステムにアップロードし、そのビデオで学習者は練習することができる。本研究では、練習版と提出版の2種類のビデオを作成し、練習版では右側に映像として、シャドーイングの素材を流し、左側の黒板にその素材のスクリーンショットを載せた。提出版は、シャドーイングの素材は同じだが、スクリーンショットを載せず、ビデオをスタートしたら、自動的に録音できるように設定している。



図1 Speak Everywhere イメージ図

#### 3. 2 シャドーイングの素材

シャドーイングの素材は、無料で視聴できる映画の予告編を利用した。映画は、なるべく聞きとりやすく、語彙がわかりやすいものを選んだ。「君の名は。」、「海街diary」、「ちょっと今から仕事やめてくる」などの15本である。このうち、受講生は自分の好きな素材を選ぶ。

### 4. 実践内容

シャドーイングの授業を2017年度の春学期と秋学期に、関西学院大学国際学部で開講しているJAPANESEクラスで実践した。実践内容について以下、詳細を述べる。

#### 4. 1 受講生の概要

2017年春学期に実践したクラスの受講生は8名で、国籍は台湾、中国、韓国、ウガンダ、帰国生（日本国籍）である。レベルは中級下レベル、CEFRのA2にあたる。

秋学期に実践したクラスの受講生は9名で、国籍は台湾、韓国、マレーシア、ネパール、帰国生（日

<sup>1</sup> <http://speak-everywhere.com/> 参照

本国籍)である。レベルは中級上レベルで、CEFRのB1からB2にあたる。

#### 4.2 コースのスケジュール

コースは表3のとおり実施した。コースは1学期14週、週に1回90分の授業である。戸田・大久保(2011)によると、「授業で導入した日本語の音韻知識がシャドーイング実践における気づきを促す」ということで、第1回目には日本語の音韻知識について紹介する授業を行った。コース終了後も自律的に学んでもらいたいため、最初は「Speak Everywhere」のログイン、シャドーイングの練習方法を紹介したが、それ以後は、シャドーイングの練習は課題として授業時間外に行うよう指示した。

表3 JAPANESE コースのスケジュール

第1回目	・Speak Everywhereの紹介(ログイン、練習方法、録音) ・日本語の発音、特にアクセント、イントネーション、リズムについて講義 ・受講生は自分の発音の苦手なところを考え、目標を設定する
第2回目	(1対1で)・課題文の音読(発音チェック) ・発音の苦手なところと設定した目標について話す
第3-13回	・課題としてシャドーイングを行う (春学期のみ、1対1で自己評価について話す)
第14回	(1対1で)・第2回目に行った課題文の音読 ・このコースや目標について受講生にインタビュー

#### 4.3 活動の手順

シャドーイングの手順は以下のとおりである。

##### (1) 素材を選ぶ

受講生は素材を選び、練習版のビデオを見ながらシャドーイングをして練習する。

##### (2) 録音し、自己評価票を提出する

- ・受講生は十分な練習を終えたら、提出版のビデオでシャドーイングをする。提出版は自動的にオンライン上にシャドーイングした声が録音され、提出される。
- ・自己評価票には、①長音や促音などの特殊拍の発音、②アクセント、③イントネーション、④リズムを4段階で評価する項目と、いい点とできなかった点を自由回答形式の項目がある。それを週に1回記入し、クラスの掲示板上に提出する。

##### (3) 復習する

- ・教師はオンライン上で提出された音声を聞いて、フィードバックを行う。オンラインでは、テキストと音声に記載できるので、不自然に聞こえた箇所を取り出して録音する。また自己評価票には、視覚的にどこが違うか、アクセント核やイントネーションカーブを書いて説明する。
- ・受講生はそのコメントを見たり、教師の録音を聞いたりして復習する。また自己評価票はファイルに綴じる。

興味がある素材がない場合は、自分で素材を選び、その素材でシャドーイングした音声の提出も可とした。そのため、希望の受講生にはICレコーダーを貸し出した。

## 5. 調査内容

実践したシャドーイングによって、受講生の発音が向上したのか、また自己モニター力が向上したのか、その効果を図るために、春学期と秋学期の全受講生対象に以下の調査を行った。

### 5. 1 発音の向上について

受講生の発音が向上したか図るため、シャドーイング実践前後に行った課題文の音読（発音チェック）を比較する。

課題文の内容は、特殊拍のある文、多様なイントネーションがある文、映画の予告編によく出てくる文を選んだ。調査方法は（1）～（3）の順に行った。

- （1）受講生が10例音読するのを録音する
- （2）その録音を聞いて、イントネーションとリズムについて1点か0点、点数をつける
- （3）実践前後で比較する

その結果、春学期の受講生は一人平均16点だったが、シャドーイングの実践後は一人平均18点に上がった。「しない?」「しよう」などのイントネーションや「サッカー」「ようじ」などの特殊拍が改善された。プレテストでは、受講生が読むスピードがかなりゆっくりで、ポーズがあいていたが、シャドーイングの実践後はスピードが速くなり、ポーズも少なくなる。

秋学期の受講生は、1人平均18点だったが、シャドーイングの実践後は一人平均19点に上がった。春学期と同じく、イントネーションや特殊拍が改善された。

### 5. 2 自己モニター力の向上について

受講生の自己モニター力が向上したかどうかを図るために、毎回提出した自己評価票のコメントについて分析する。次に第14回目に行ったフィードバック時のインタビューを分析する。

#### 5. 2. 1 自己評価票のコメントの分析

受講生は、シャドーイングの録音提出のほかに、毎週自己評価票を提出している。自己評価票には、長音や促音などの特殊拍の発音、アクセント、イントネーション、リズムを4段階で評価する項目と、いい点とできなかった点を自由回答形式で答える項目があるが、ここでは自由回答のコメントを分析する。

どの受講生も最初は真面目に取り組むのだが、進むにつれてだんだんコメントがなおざりになっており、自己評価票を記入するモチベーションが低下していた。初回時にコメントの悪い例の見本として「前よりよくなった」というコメントを示し、具体的にどこがよくなったか書く必要があることは伝えていたが、適当に記入していることがあった。それは最初に決めた目標を見失い、自分の発音の弱点を忘れていることが原因だと思われる。フィードバックとして、アクセントや特殊拍についてどうだったかコメントを求めるよう指導はするが、あまり改善は見られなかった。

春学期の受講生は、レベルがA2ということで予告編の言葉が難しく、シャドーイングするのに時間がかかったようである。そのため、（1）や（2）のようなコメントが多数見られた。

- （1）スピードが速くて、ほとんど言えなかった
- （2）〇〇ということばが難しく、言えなかった

他には(3)のように、どこがおかしいか分からないので、単語のすべてがおかしいとコメントしたり、(4)のように、実際は「だろ？」というイントネーションができていなかったのだが、音声の知識が少ないために、イントネーションと指摘できず発音がおかしいと全体的なコメントをしたりするものも見られた。

(3) 単語の1つ1つの音が違う。

(4) 「家出してきたんだろ」の発音。

そのため、コース半ばで個別にフィードバックの時間をとり、いつもシャドーイングで苦手なところを教室と一緒に考えて、それを改善できることを目標として練習するように指導にした。それ以降は(5)や(6)のように細かい指摘もできるようになった受講生もいたが、変化が見られない受講生も多数いた。

(5) 小さい「っ」の発音が違う。

(6) 「おとうさん」の「う」がおかしい。

秋学期の受講生も、早くて言えないというコメントが見られたが、春学期の受講生よりも日本語レベルが高いので、うまくシャドーイングしているものがほとんどであった。しかし(7)や(8)のようにおかしい部分は指摘できるもの、何がおかしいかが分からないコメントが見られた。

(7) 長女とお母さんのところが結構難しくて、聞いてみたらやはりどこか変でした。

(8) 「全体的に躍動感がほしいんですよ」のところがどうやって発音すればいいか分からなかった。

秋の受講生は複合語のアクセントや促音などが苦手なことが多く、フィードバック時に視覚的に図を書いて指摘したが、それが次に直っていることは少なかった。それで授業でもテキストで音韻に関する教材を取り扱うようにした。それ以降(9)や(10)のように、おかしいと指摘する範囲は狭くなったものの、何がおかしいというところまで踏み込めなかった。

(9) 「なんだって」がおかしかった。

(10) 「あるわけねーだろう」の発音ができなかった。

以上の分析から、自分の発音のおかしいところには気づくものの、この実践を通して、受講生の自己モニター力が向上した要素は見られなかった。実践に入る前に、自分の目標をたてたが、大きな長期目標を考える受講生が多かったので、発音の弱点の詳細と一緒に考えて、時にはこちらが指摘して、そこに注目して自己評価票を記入してもらったほうがよかったかもしれない。そうすると自己評価票を書くモチベーションがだんだん低くなっていったのも避けられたかもしれない。シャドーイングを行うことで、発音が向上していることが明らかになるように、細かい目標も立て、それが達成したことによって、モチベーションを上げるようにすべきだった。

## 5. 2. 2 第14回の受講生へのインタビューの考察

第14回の授業では、1対1でインタビューを行った。その結果、(11)～(14)のような意見が得られた。

- (11) スピードが速かった。
- (12) 練習は好きだった。必要だと思った。
- (13) 録音した音を聞くことが面倒だった。
- (14) 自分の声を聞くのが苦痛で、本当にシャドーイングするのが嫌だった。

(11)については、自己評価票でも同じである。シャドーイングの素材を映画の予告編にしたことで、シャドーイングの練習は単調にならず、(12)のような意見をもらい、モチベーションは上がったようだ。しかし(13)のような意見もあり、自分の声を聞いて自己評価票を書くことが面倒であったようだ。

(14)について、自分の声を聞くのが嫌な受講生は毎回1名はいるが、慣れてもらうしか方法はないように思われる。自分の声を聞かない限り、自分の発音についてモニター力が見つからないので、積極的に聞くように伝える必要がある。

インタビュー時に自己モニター力について言及している受講生は誰もいなかった。自己モニター力について意識させるため、授業中もフィードバックも常日頃口に出す必要があったかもしれない。

### 5. 3 調査のまとめ

実践前後に行った課題文の音読の比較、自己評価票のコメントの分析、インタビューの分析の結果から次の(1)～(2)が明らかになった。

- (1) シャドーイングの実践で、イントネーションや特殊拍の向上が見られた。
- (2) 自己評価票とインタビューの分析から、自己モニター力の向上は見られなかった。

### 6. 今後の課題

以上、本研究では、オンラインプログラムを利用してシャドーイングを実践することで、発音と自己モニター力の向上を目指した。その結果、全受講生に発音の向上が見られた。しかし、受講生はどこか悪いことは気づくものの、何が悪いかは分からないため、自己モニター力が向上した要素は見られなかった。

今後の課題として、自己モニター力を向上するためには、録音した自分の音声を聴いて、モデル音声と比較して自己評価票を詳細に記入する必要がある。そのためには、実践前に自分の弱点について細かいところまで分析し、細かい目標を設定し、それを1つずつ達成するようにしたほうがいい。そうすれば自分の発音を何度も聞いたり自己評価票を書いたりするモチベーションが低くなっていたことも回避できただろう。そのほかにも、コース半ばで自己評価票についてのディスカッションを行ったり、日本語の音韻について講義したりするなど授業内で工夫する必要がある。

「Speak Everywhere」を使って発音指導をしたことで、受講生からの音声ファイル提出のトラブルはなく、スムーズに進めることができた。しかしこのシステムでは、教師が音声でフィードバックできるという機能があるが、そのフィードバックを聞いている受講生を確認できなかったことは残念であった。また生の素材を使うことで、受講生のモチベーションは上がったようだが、シャドーイングがなかなかできなかったレベルの受講生もいたので、受講生のレベルにあった生の素材を見つける難しさを知った。

本研究は、関西学院大学 2017 年度「先端的な授業改善に関する実践研究」の助成を受けた。

## 参考文献

- 大久保雅子・神山由紀子・小西玲子・福井貴代美 (2013) 「アクセント習得を促すシャドーイング実践：効果的な実践方法を目指して」『早稲田日本語教育実践研究』第 1 号、pp. 37-47.
- 柴田智子 (2015) 「Speak Everywhere を使った自律的発音学習」The 6th International Conference on Computer Assisted Systems for Teaching & Learning Japanese Proceedings University of Hawaii、pp. 165-168.
- 杉本美穂・水田佳歩・奥村恵子 (2017) 「スマホ音声認識アプリを用いた自律発音練習—自己課題発見から自律練習への試み—」『早稲田日本語教育実践研究』第 5 号、pp. 187-188.
- 築山さおり (2013) 「初中級日本語学習者の運用力向上を目的としたシャドーイングの活用について」『同志社大学日本語・日本文化研究』第 11 号、pp. 39-57.
- 戸田貴子・大久保雅子 (2011) 「日本語学習者の自律学習を促すシャドーイングの実践と気づき—発音の滑らかさの向上を目指した練習方法に関する一考察」『ヨーロッパ日本語教育』第 15 号、54-60.
- 中川千恵子 (2014) 「学習者の自律学習を目指した発音学習」日本語教育方法研究会誌 21(1)、pp. 98-99.